

自己評価報告書(最終報告)

コース等名

現代教育課題総合コース

記載責任者

小西 正雄

■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 教員就職率向上方策について

本学は第二期中期目標・中期計画において、「学士課程において教員就職率を70%以上にする」と明記している。教師を目指す学生が一人でも多く自己の進路希望を実現できるよう、この数値目標を達成するのはもちろんのこと、より一層教員就職率を上げるため、貴専攻・コースではどのような取り組みを行うか。具体的な方策を示してほしい。

1. 目標・計画

小コースは学士課程の学生を擁していない。

2. 点検・評価

小コースは学士課程の学生を擁していない。

Ⅱ. 分野別

Ⅱ－1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

長期履修学生の率が高まり、それにともない多方面からの指導・支援を行う必要性も高まってきた。長期履修学生については、小コースではL2の5月上旬にゼミ配属の決定を行っているため、それ以後は各ゼミ指導教員が所属学生の教育・研究指導ならびに生活指導・就学支援に鋭意取り組むが、昨年度は、就学に課題をかかえた学生が複数いたため、とくに生活指導面に十分に配慮・留意して指導を進める。5月上旬までのM1、L2学生の指導・支援についてはコース長が執り行う。とくにこの時期は教務関係やゼミに関する相談が多いうえに奨学金申請時期にもあたっているため、個別面談を丁寧に行い、学生のニーズの把握に努める。またゼミ配属後も、適当な時期にコース長による個別面談を行い、単位修得状況や進路相談に応じる。今年度はコース長が大学院教務委員と就職委員を兼務しており、一定の成果が期待できる。

2. 点検・評価

年度当初のゼミ配属や奨学金手続きについては、かなり要領よく遂行することができた。前期終了直前に、学生の生活指導に関連する事案が発生したが、コース教員全員の尽力で事なきを得た。ただし、募集定員を大幅に上回る多様な院生を収容している以上、今後も学生ニーズ把握に一層つとめる必要があろうとの教訓は残った。後期の大きなイベントである就職支援ならびに採用試験等の結果集計であるが、例年、情報が集まりにくく苦労があったが、今回は就職支援室から一覧ファイルを入手し、コースメンバーリストや修士論文発表会などの機会をとらえるなどして、かなり要領よく情報を収集し、指導に役立てることができた。

Ⅱ－2. 研究

1. 目標・計画

コースが主体となって実施する唯一の授業科目「教育実践フィールド研究」をフィールドとして、学生の教育支援の在り方について検討を深める。「教育実践フィールド研究」では今年度は昨年度に引き続いて防災教育をとりあげる。昨年度は鳴門市黒崎小学校との連携教育で大きな成果をあげることができ、学校現場からもその継続を強く期待されているので、この環境を活かした継続的かつ計画的な学生支援体制の構築を図り、その成果を検証する。

2. 点検・評価

谷村准教授を中心に黒崎小学校、黒崎幼稚園、鳴門西小学校と連携して行った「教育実践フィールド研究」は、それを一つの理由として黒崎小学校が防災教育実践で徳島県で唯一の表彰を受けるなど、画期的な成果をあげた。また大学全体の防災行事を学生が主体的に企画したのも、今年度の実践研究の大いなる成果である。それらの成果の一端はA4版カラー印刷120ページの冊子にまとめられた。

Ⅱ－3. 大学運営

1. 目標・計画

インターネットを活用した遠隔教育プログラムの存置コースとしての使命を認識し、26年度の開設にむけコース運営体制、予算配分計画等の検討、入試運営ならびに合否判定要領の検討などに果敢に取り組む。また同プログラムとともに通学制も含めて一層の受験生確保に向けて、パンフレットの更新、配布、進学実績のある大学、教育委員会への訪問を予算の許す限り積極的に計画し実行する。

2. 点検・評価

インターネットを用いた遠隔教育プログラムの開設準備は、担当事務各位との連携のもと、ほぼ予定通りに進み、4人の1期生を迎えることができた。
また、大学院定員確保については、パンフレットの更新や私学訪問が効を奏し、今年度も定員を大幅に超える合格者を出すことができた。

Ⅱ－4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

1. 目標・計画

従前に引き続き、在ホノルル日本人授業補習校への授業支援を行う。補習校との調整が支障なく進んだ場合は、平成26年1月に教員少なくとも2名と学生有志による訪問指導実施の予定。

2. 点検・評価

在ホノルル日本人授業補習校との連携については、1月に小西コース長が現地を訪問し、授業支援、デジタル教科書の購入等に関する協議を行った。また田村講師はフィリピンの小学校の授業支援に尽力した。金野准教授は道徳教育研究を中心に、全国規模での活動に参加するかたわら附属学校の道徳授業の改善に向けて支援を行った。藤村准教授は昨年度に引き続き、東日本大震災被災地の復興支援に奔走した。谷村准教授の防災教育支援については既述のとおり。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

防災教育、遠隔教育、国際教育支援などの諸活動にかんがみて、相当程度の貢献をなしたと考えている。